
レモンが蜂蜜につけられたようです。

撫子 雪姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レモンが蜂蜜につけられたようです。

【Nコード】

N4210BA

【作者名】

撫子 雪姫

【あらすじ】

片思いの男子が、地味な女子を助け、それから……………？

(前書き)

また恋愛小説を書いてしまいました。
心広く読んでください。

教室の片隅でまた彼女は本を読んでいる。

クラスの誰とも絡まないし、必要最低限なことしか話かけられない。むしろ、地味だから何かの賞などに入ったりすると、そこの女子から「調子こいてる。」「ウザイ。」などの悪口を言われることも多々ある。

僕、高橋 大輔は彼女、田中 真由美のことが好きだ。

どこが好きと聞かれると困るが、あの雰囲気や強いところが好きなんだと思う。今までにない感情が生まれた。この話かけたたくても話かけられないもどかしさ。かまいたくても、迷惑になるんじゃないか。話かけられたくないんじゃないか。などの自問自答がグルグルと頭の中で混ざり合う。

気になる。真由美さんのことが。これを恋愛感情というものなのだろうか。

ある日のことだ。友達の中山 裕樹が、「一緒に帰らないか。」と誘ってきた。

僕は教室に財布を忘れてきてしまった。裕樹にはちゃんと謝って、先に帰ってもいい。と伝えた。

教室に入ると、誰もいないはずの教室に人影を感じた。

「あんたさあ、調子こいてんじゃないよ。」

「調子なんてこいたことないわ。」

真由美さんの周りには、クラスの中でも悪い意味で目立っている人の女子が取り囲んでいる。

「その、人を見下した感じが調子こいてるって言うてんの!?!」

「あなたの基準で調子こいてるようだけど、私の基準では調子なんてこいてないわ。普通にしているだけよ。」

女子達は真由美さんを平手打ちしようとした。こんなときこそ男の役目だと思い、ドアを開けた。

「ヤベエ。忘れ物しちゃったよ。まだ開いててよかったあ。」

「ハア！？大輔ダメ何しにきやがった」

「え？見てのとおり、忘れ物を取りに来ただけだけど？」

本当は、「やめろ。お前ら。」とか、格好つけて行きたかったが、女子は恐ろしいもので、とても逆らえそうにない。

女子達は舌打ちしながらその場を去っていった。

僕は自分の机に財布を取りに行った。いやあ。あのタイミングでの登場は勇気があるな。僕は意外とやるときはやる男なのかもしれない。

「つと、あつたあつた。」

真由美さんは僕のことを気になるらしく、僕をガン見している。あれ？真由美さんってこんな人だったっけ？僕は少し真由美さんをいじりたくなつたのかもしれない。思い切って話かけた。

「何か用？」

真由美さんは、話しかけられることに驚いたようで、少し目を見開いた。

「いや。別に。本当に忘れ物したんだなあと思って……
あつ。イヤ、別に、助けに来てくれたんだか思っていないし、あの、

その。」

可愛い。可愛すぎる。こうなったら黙るしかない。

「ほら、裕樹君とあんまり話したことないし、私、見てのとおり虐められてるし。」

「そんなの関係ないよ。僕、あんまりそういうの気にしないから。」
「そう、なんだ。」

僕は真由美さんともっと長く話していたと思ったが、あまりにも不自然な感じになるのでそのまま立ち去ることにした。

次の日の掃除の時間。

今日は真由美さんの掃除の分担は黒板担当だ。同じ掃除の場所だから、少し嬉しいと思ってしまう。

黒板掃除を一生懸命やる姿もまた可愛らしい。
雑巾の水を捨てに行くため、廊下に出た。雑巾を触ったおかげで、手が臭い。不覚にもため息をついてしまった。

「何、ため息ついてるの？」

「え？」

真由美さんだ。話かけられたのは初めてかもしれない。

「昨日、言い忘れたんだけど、ありがとうね。」

「え？昨日？」

わかっている。昨日、叩かれそうになったのを助けてあげたから。

「ほら、あのままだと私、ビンタされていたから。」
「そうだったんだ。」

知っている。一部始終見ていたから。でも、わざと気づいてなかったフリを続ける。

「だから、さ、ありがとうって………言いたかったの。」

不意に見せた笑顔にまた惚れてしまった。今すぐ好きと言いたいけれど、言えない。

まるでレモンの蜂蜜漬けのような甘酸っぱい気持ちになった。

(後書き)

パツと思いついて、サツと書きました。

男の人が考えていることが分からないので、地味系な文学系の男子を書かせていただきました。

感想やアドバイス、指摘を気軽に書きください。

読んでくださりありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4210ba/>

レモンが蜂蜜につけられたようです。

2012年1月11日02時49分発行